

「セカンドライフの住まい」の提案設計に関する報告と考察

小宮 容一* 鈴木 儀雄** 山本 紗代子*** 井上 徹****

A study & report on design of “house of second-life”

KOMIYA Yoichi. SUZUKI Yoshio. YAMAMOTO Sayoko. INOUE Toru.

1. はじめに

本報告と考察は、(社)日本インテリアデザイナー協会関西事業支部(研究委員会)が、2009年10月1日～31日、大阪市立住まいの情報センター8Fで開催した『「終のすみか」を考える.セカンドライフの住まい展』に於いて、本発表者3名が、発表したセカンドライフ住宅の提案設計についての報告と考察である。

当学会の於いて2008年9月発表した『「セカンドライフの住まい」に関するアンケート調査報告と分析』を受けて、発表者3名が、個々に提案設計したものである。

2. 2008年9月の分析要旨

アンケート集計数383名の内、40代50代60代男女のセカンドライフに求める傾向は次の様になった。住宅については「現状にまま」が1位で次が「住み替え」であった。住み替えの場所は郊外、都会、田舎の大きな差を得なかった。戸建住宅のタイプは「平屋」が支持された。

部屋については、リビングは「LDK」が支持された。ダイニングでは明快な希望を見出せなかった。寝室は「ベッド」が支持され、夫婦同室・別室では 女子50代60代で「別室希望」が勝った。欲しい部屋は「趣味の部屋」が支持された。

3. 小宮案

上記アンケートの『欲しい部屋は「趣味の部屋」』を取り上げ、セカンドライフの「自己実現タイプ住宅」を提案した。木造1階建て、床面積88.28m²(26.7坪)、敷地面積147.82m²(44.71坪)。設計に当たってクリアすべき、次の6条件を設定した。(1)自己実現対応、(2)癒し対応、(3)夫婦別寝、(4)友人対話対応、(5)衛生・健康対応、(6)車椅子対応、である。

「自己実現対応」と「夫婦別寝」に対して、夫婦それぞれ個室とし、個室内に、ワークテーブル(カウンター型)を設けた(図1北部)。趣味の内容についてはこの設計では、断定せず、一般解としてワークスペースの確保と、ワークカウンターの設置とした。

「癒し対応」に対しては、広いバスルーム、十分なリビングルームとAV装置の充実とした。「友人対話対応」については、広いダイニングルームに半円型テーブルとし5～6人の友人が集える様にした。「衛生・健康対応」では、バス・洗面・トイレは床暖房とした。他の部屋については予算が有れば必要に応じて設備するとした。「車椅子対応」は、玄関へはスロープ、ホールとDKは段差0mm。廊下・トイレ・寝室等車椅子の動作スペースを確保した。またバリアフリーとして、出入口は全て引き戸とした。

4. 鈴木案

「第2の居場所～終のすみかを考える～」

退職後子供たちは自分の家庭を持ち、夫婦で郊外に暮らすケースを考える。老後の生活を見据え、バリアフリー・省エネ＝ランニングコスト削減を考慮し、ペアガラスや通気断熱、可動ルーバ



写真1. 展覧会会場風景

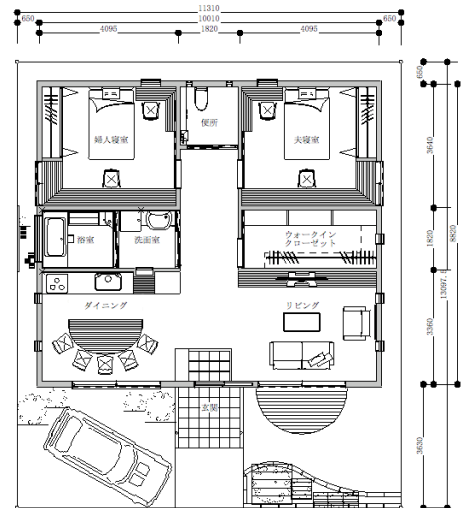


図1. 小宮案平面図(配置図)



写真2. 小宮案モデル

ーによる日光の調整などにおける熱負荷の軽減、太陽光発電、地中熱ヒートポンプにおけるクリーンエネルギーの活用を取り入れた。また、和室を設け子供家族が遊びに来た時も自由に寝泊まりできるスペースとし、広いリビング・ダイニングで家族や友人を集め、パーティーや趣味の場とした。

◆部屋の特徴

・和室：

子供家族来訪時の寝室、介護時のベッドルームとしても使用

・バスルーム、洗面脱衣、ラバトリー：

介護スペースを確保

・ベッドルーム：

ワンルーム別ベッドとし、お互いの気配を感じられる空間

5. 山本案

夫婦に限定せず兄弟・姉妹・親子・友人・・・etc と暮らす事を前提に提案した。セカンドライフを迎える年齢期、個性の確立している自分以外の人と気持ちよく暮らすための住まい設計のキーワードを「ほど良く・心地よく」とし、希望の多かった1戸建平屋で2人住まいとして床面積90.25㎡とした。

LD&Kは「同居人の気配がほど良く感じる見え隠れ」をテーマに、求心的な壁を中心にその他の空間への動線も含む自在性の高い回遊型ワンルームとした。直接自然光の入らないエリアには天窓を設け昼間の消費電力を抑え、又天井から入る柔らかい光がメリハリと立体感をもたらす仕掛けをしている。アンケートで希望の多かったLDKだが40代女性に支持されたK独立型とした。引込み建具の開口を設け、孤独感をなくす配慮と回遊できる自在性が特徴。又この開口はくつろぎや友人を迎えてのパーティーなど生活シーンによって変化するLDを演出。個室には趣味やライフワークにも対応できるエリアを設けた。1室には和畳空間も設え、看護や介護時の寝室としても対応。バス・洗面・トイレ・ユーティリティは一箇所にまとめて設置。車椅子対応である。関心の高かった「収納」は「あるべきモノがあるべきところに」をキーワードに私用物は個室で完結させ、共有物はそれぞれのシーン付近に設置。「玄関納戸」も同様の意。美しく心地よく暮らす提案である。開口広さは全て車椅子対応。玄関以外はバリアフリー。玄関へはスロープ。

6. まとめ

3人3様の提案設計であるが、終のすみかに共通して、車椅子&バリアフリー対応がある。現代の住宅設計に共通する、太陽光利用による省エネ対応がある。夫婦の寝室については、小宮・山本は夫婦別室、鈴木は同室内を家具で仕切った。L・D・Kについては小宮・鈴木は1室LDK型、山本はLDと独立Kとした。

「高齢者の物持ち」というが、収納については、3者共に、クローゼットや納戸など充実している。

鈴木・山本は、和室を1室用意し、子供家族や友人の来訪・就寝、さらに将来、介護が必要な時期の使用に対応している。

このようなことから、設計時点より将来の住み手の健康・身体状況の変化を想定した設計の必要性が、明確となった。

(*芦屋大学教授 **大阪芸術大学講師***スペースYD****芦屋大学講師)

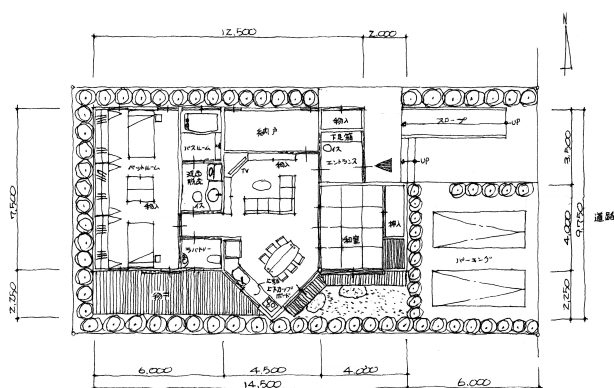


図2. 鈴木平面図 (配置図)



写真3. 鈴木案モデル

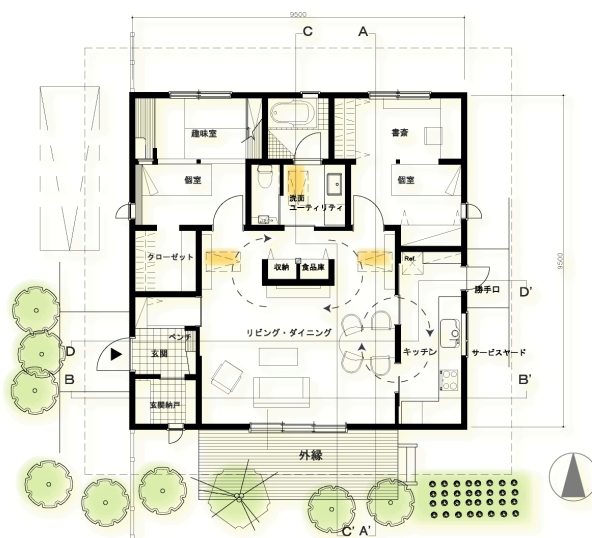


図3. 山本案平面図



写真4. 山本案インテリアパース